

## 【歴史・民俗】

## 尾張守護と智多郡主に関する覚書

## ——分郡守護論の現状——

中部大学人文学部 准教授 水野 智之

## はじめに

中世の尾張国智多郡<sup>(1)</sup>に関する幕府の命令や訴訟の裁定は尾張守護を通じて執行されたが、南北朝末期から室町期にかけては尾張守護でなく、それ以外の者によって現地に伝達、執行がなされた。具体的には主に一色氏が尾張守護とは別に幕府の命令を現地に通達して、智多郡の支配がなされていた。一色氏のように、一国の守護と別の存在が同国内の郡やある地域に関する幕府の命令を執行することは多く見受けられ、研究上、「分郡守護」と規定されて論じられてきた。

研究史を略述すると、1967年に佐藤進一氏が畿内以東諸国の守護の沿革を検討され、摂津・尾張・近江国内の一部の郡で守護権が分割されていると評価された<sup>(2)</sup>。これは「分郡守護」と見なされ、1970年代から80年代にかけて多くの研究者が類似の事例を検証していった。

1982年に今谷明氏が半国守護を含め、「30か国、56か郡」の例を「分郡守護」としてあげられた<sup>(3)</sup>。戦国期の事例や半国守護の事例を除くと、具体的には次の地域であるという。

山城国愛宕郡、大和国宇陀郡・吉野郡・宇智郡、摂津国中嶋（西成郡）・多田院領（能勢・北河辺郡）・同国有馬郡・東生郡・住吉郡、伊賀国名張郡、伊勢国一志郡・飯高郡、尾張国智多郡・海

東郡・海西郡、三河国渥美郡、遠江国小笠郡、近江国浅井郡・伊香郡・坂田郡・犬上郡・志賀郡、陸奥国賀美郡・黒河郡、越前国大野郡、丹波国天田郡・何鹿郡、但馬国朝来郡、因幡国智頭郡、石見国邇摩郡、播磨国明石郡・美囊郡・印南郡、備中国哲多郡・下道郡・浅口郡、安芸国安南郡・山県郡・佐東郡、同国東西条・日高・蒲刈島、長門国阿武郡・厚東郡、紀伊国海部郡・在田郡、伊予国新居郡・宇麻郡・宇和郡・喜多郡、肥前国神埼郡

このように「分郡守護」は幕府の一制度として機能していたと考えられてきたが、1988年に川岡勉氏がこの点を再考されて、疑問点を指摘された<sup>(4)</sup>。すなわち、「分郡守護」とよばれてきた諸事例は荘園の知行権などと共通性を持つもので、「分郡知行制」と概念化すべきとの理解である。川岡氏は守護権の分割と評価できる例もあるが、郡地頭職など従来の支配権の延長線上に考えるべき例もあると説かれた。この提起により、各地域の事例について「分郡守護」と評価してよいのかどうか再検討されるに至った。

2013年に、山田徹氏は「分郡守護」の再検討を改めて提起され、その捉え直しを主張された<sup>(5)</sup>。山田氏はこれまで「分郡守護」と見なされていた例はほとんどが守護と見なしがたいと指摘され、その概念の有用性を疑問視された。最も「分郡守護」ら

しく活動をしている尾張国智多郡の一色氏であっても、その活動をあえて「分郡守護」と規定するより、むしろ「郡主」「知行主」として捉えるべきであると説かれている。

2016年に、一色氏の権力構造を分析されて大著を刊行された河村昭一氏は山田氏の主張に従い、智多郡における一色氏の立場を「郡主」と説かれた<sup>(6)</sup>。最近の研究動向では智多郡における一色氏の立場は「郡主」と捉え直す傾向にある。

智多郡は幕府の遵行命令を伝えられた一色氏の史料がいくつか知られており、いわゆる分郡守護論において重要な論点となっている事例であると見なされる。そこで本稿では尾張国智多郡に関する尾張守護と一色氏の活動を紹介し、特に最近の研究で明らかにされた点を確認する。加えて、智多郡における一色氏の立場と「郡主」論に対して、若干の私見を述べることにしたい。

## 1. 鎌倉・南北朝期の智多郡と尾張守護

一色氏が智多郡に関与する以前の尾張守護の動向を確認しよう。1185年(文治元年)11月、源頼朝は諸国に守護、地頭を設置したが、その後の尾張国における守護の初見史料は『吾妻鏡』建久6年(1195年)6月29日条である<sup>(7)</sup>。これは鎌倉に下る源頼朝を小野成綱が萱津宿で接待したことを伝えるものである。

智多郡と成綱の関わりを示す史料は乏しいが、1200年(正治2年)6月29日、梶原景時の妻で、小野成綱の娘は尾張国野間内海などの所領を源頼家に安堵されたことが知られる。次の史料はそのことを伝える『吾妻鏡』の記事である<sup>(8)</sup>。

【史料ア】『吾妻鏡』正治2年(1200年)

6月29日条

廿九日甲寅、故梶原平次左衛門尉景高(北条政子)妻野三刑部者、系成綱女尼御台所宮女、御寵愛無比類、且雖為女性、依為其仁、故將軍御時、雖領尾張国野間内海以下所々訖、而夫誅戮之後、一切隱居、頗成恐怖之思云々、仍有其沙汰、領所等不可有相違之旨、今日蒙仰、令安堵云々、

すでに源頼朝によって同所が成綱の娘に安堵されており、成綱が尾張守護であったため、同国野間内海を所持することに至ったと思われる。頼朝にとって野間は父義朝が弔われている地であり<sup>(9)</sup>、そのような地を所領として認められたことは將軍家にとって厚い信頼がなされていたためと推測される。

このように尾張守護は一族の者が智多郡において所領を保持しており、幕府との関係は良好であったが、承久の乱で成綱の子盛綱が後鳥羽上皇方に味方すると、状況は一変した。小野盛綱をはじめ、上皇方の尾張国の武士は戦いに敗れて没落した。そのため、幕府は小野氏の一族のうち、幕府方についた中条氏に尾張守護を任じた。この戦いで、智多郡大野荘の武士大野氏も上皇方に味方したために討たれ、「大野庄以下数ヶ所本領」を幕府に収公された(『尊卑分脈』清和源氏、大野・朝日)<sup>(10)</sup>。このことを踏まえると、成綱の娘が所持していた野間内海も没収されたと思われるが、そのような史料は確認できず、詳細は不明である。

智多郡と尾張守護の関わりを示す史料は乏しいが、1337年(建武4年)に足利尊氏が智多郡の枳豆志荘などを造営料所とし

て園城寺に寄進した御教書に、尾張守護名越宗教のことがうかがわれる。次にその文書を示す<sup>(11)</sup>。

【史料イ】足利尊氏御教書(「園城寺文書」)

近江国山賀庄<sup>献</sup>・伊勢国丹生庄<sup>造</sup>・  
尾張国<sup>(豆志)</sup>枳頭子庄<sup>名越遠江</sup>事、当寺<sup>(造)</sup>□宮之間、  
所令寄附也、守先例、可致沙汰之状如  
件、

建武四年二月晦日

(足利尊氏)  
源朝臣(花押)

園城寺衆徒中

尊氏は近江国山賀庄以下の所領を園城寺に寄進しており、そのうちの枳豆志庄は名越遠江入道、すなわち尾張守護名越宗教の旧領であったことが知られる。名越氏は北条氏の庶流であり、宗教が保持していたのは枳豆志庄の地頭職であると思われる。北条氏の所領は後醍醐天皇方に没収されており、足利尊氏が管轄していたこと、また尾張守護は智多郡内に所領を持っていたことが確かめられる。

その後、尾張守護は中条秀長、高師泰、土岐頼康が任じられ、羽豆岬などの南朝勢力との戦いに幕府方は勝利したことが知られるが、その期間も守護が智多郡に所領を保持していたり、遵行をしていたりすることを明確に示す史料は乏しい。たとえば、1353年(文和2年)2月23日、尾張守護土岐頼康は昨年10月9日の幕府御教書の旨に従い、尾張国衙領における地頭御家人・守護被官人の押妨をとどめるよう命じている<sup>(12)</sup>。国衙領の中には額石保など智多郡内の所領も存在していたので、頼康がそこでの押妨停止の命令を執行していたということは想定できるが、史料から頼康が

智多郡のある地域に命令を伝えていたことを明確に示すことはできない。他にも、1360年(延文5年)8月、小川中務丞と土岐東池田氏が仁木義長に同心して尾張国小河荘で蜂起したので、尾張守護代土岐直氏が3000騎余りで小河荘の城を攻撃したことを伝える『太平記』の記事がある<sup>(13)</sup>。守護の影響力が智多郡にも及んでいたことがうかがわれる史料であるが、他の一次史料でそのことは確かめられず、信憑性はやや乏しいといえる。

このように尾張守護もしくはその一族が智多郡に所領を持っていた事例はわずかながら確認されるが、守護としての職務を果たしていたことを示す史料は非常に乏しい。智多郡には熱田社や女院などの荘園や国衙領が多く、その下に地元の武士の勢力が存在していたこと、また鎌倉時代以来、將軍や得宗、そして室町幕府の権力が及んでいたことはうかがえるが、尾張守護の権力が浸透していたことは史料上、十分に確認しえないのである。そのような状況は南北朝末期に一色氏が智多郡に関わるようになるのと改まり、一色氏がその支配を行っていることを示す史料が多く確かめられるようになる<sup>(14)</sup>。

## 2. 室町期の尾張守護と智多郡主

智多郡における一色氏の動向を確認し、最近の研究で明らかにされた内容や一色氏の性格を探る上での論点などを取り上げてみたい。

### (1) 一色氏の智多郡拝領の時期とその理由

一色氏が智多郡内の遵行を命じられた文書の初見は次の史料である<sup>(15)</sup>。

【史料ウ】管領細川頼元奉書案（「醍醐寺文書」21函）

尾張国熱田社座主領同国智多郡内英比郷事、早任去七日安堵 院宣、一円可被沙汰付理性院僧正雑掌之状、依仰執達如件、

明德二年五月十二日

（細川 頼元）  
右京大夫判

（詮 範）  
一色左京大夫殿

同じ頃に次の注文も発給された<sup>(16)</sup>。

【史料エ】熱田社座主領注文案（「醍醐寺文書」21函）

熱田神領内注文

|    |       |                                  |
|----|-------|----------------------------------|
| 一所 | 英比領   | <small>為智多郡之内間、被成一色御教書畢、</small> |
| 一々 | 大脇郷   |                                  |
| 一々 | 土取村   | 五反畠                              |
| 一々 | 新密宗料所 |                                  |
| 一々 | 藏司田   |                                  |
| 一々 | 寺家管領  |                                  |
| 一々 | 科野郷   |                                  |

已上 七カ所

明德二年五月日

【史料ウ】、【史料エ】より、智多郡内の英比郷の遵行は一色詮範に命じられており、当時の尾張守護土岐満貞に伝達されていないことがうかがわれる。このように智多郡の管轄が分割された理由は、1389年（康応元年）から1390年（明德元年）閏3月にかけてなされた土岐康行征伐に伴う措置と考えられている<sup>(17)</sup>。同時期に海東郡も山名氏に配されて、尾張守護の管轄から切り離されており、尾張国の分郡分割は幕府が外様守護土岐氏の勢力拡大を抑制するために実施され、土岐氏の分国に楔を打ち

込んだものとする<sup>(18)</sup>。あわせて、河村昭一氏は一色氏が1389年（康応元年）11月に尾張へ、翌1390年（明德元年）に美濃へ出兵したことを明らかにされ、一色氏の智多郡拝領はその軍事行動に対する恩賞であったと説かれている。非常に興味深い見解である。これより一色氏の智多郡拝領の時期は1390年（明德元年）閏3月より後で、1391年（明德2年）5月12日より前になされたと導かれるが、その日時の詳細は明らかでない。詮範は1388年（嘉慶2年）より三河守護を務めており、一色氏は「三河湾を含む伊勢海東半を支配下に収めた」と見なされている<sup>(19)</sup>。

なお、詮範は1394年（応永元年）8月以降、10月までに海東郡を拝領した<sup>(20)</sup>。その背景は明らかでなかったが、河村氏によると、同年7月に幕府が大和の小夫宗清を討伐した際、詮範が赤松義則・畠山基国と共に参戦しており、その恩賞として与えられたと説かれている。この点も最近に明らかにされた貴重な見解である。一色氏の海東郡支配は応永末年頃まで続き、それは尾張守護の勢力伸長の牽制や伊勢海での流通などへの関与をいっそう強めたと考えられる。

## （2）一色義貫謀殺後の尾張守護と智多郡主

智多郡は一色詮範から満範、義範（のちに義貫と改名）へと継承された。その間に、一色氏は幕府の遵行を務めたり、国衙領の代官職を請け負っていたりした<sup>(21)</sup>。一色氏は三河国、智多郡、海東郡の支配を強めていたが、義貫（もと義範）は將軍足利義教との関係が悪化してしまい、1440年（永享12年）5月、義貫が越智氏討伐のため、大和国に出陣していた際、義教の命令を受



けた武田氏らによって謀殺された。智多郡は義貫討伐の功績を遂げた武田信栄に与えられることとなった。『師郷記』永享12年(1440年)6月29日条には「武田尾張チタノ郡拝領之云々」とある<sup>(22)</sup>。

智多郡を拝領した武田信栄であったが、同年7月23日に若狭国で死去した(『師郷記』同日条)。その後、智多郡の知行者について、十分に検討されていなかったが、河村氏は信栄の弟信賢が若狭と智多郡を継承していたのではないかと指摘されている<sup>(23)</sup>。無理のない解釈であり、従うべきであると思われる。

その後、智多郡における武田氏の地位が失われた可能性を示す文書がある。次にそれを示す<sup>(24)</sup>。

【史料オ】管領細川持之奉書写(『塩尻』卷43)

尾張国英比郷事、早任綸旨、可被沙汰  
(敷政門院庭田幸子)  
 付伏見殿南御方雑掌のよし所被仰下  
 候、仍執達如件、

嘉吉元年閏九月卅日

(細川持之)  
 右京大夫花押

(斯波義健)  
 千代徳殿

この文書により、智多郡の分割は解消されて、尾張守護の管轄に戻されたのではないかと捉えうるが、河村氏はこの時点においてもなお武田氏が智多郡を領有していたのではないかと見なされている。山田徹氏はこれを郡知行者が幕府の遵行命令を優先的に受けるといっても絶対的ではない例として位置づけられているが、なぜ一国守護の遵行が「分郡」の智多郡に及ぶのかという点には明確な理由を示されていない<sup>(25)</sup>。河村氏によると、1441年(嘉吉元年)8

月下旬から9月上旬にかけて智多郡主の武田信賢は赤松満祐討伐のために播磨国に出陣し、閏9月21日に帰京したが、同じ頃に若狭国で一色氏率人の蜂起を鎮圧するため、若狭国に向かった。このようなことがあって、武田氏は智多郡で実効性のある遵行をできる状況になかったため、斯波氏に命令が伝達されたのであると説かれた<sup>(26)</sup>。この点は従来にない新しい見解であり、管領が守護もしくは郡主の個人的な事情に配慮して遵行命令を使い分けていたとしたら、非常に興味深いことである。

しかし、河村氏自身も述べられているように、1441年(嘉吉元年)6月24日、足利義教の没後に「武家被突鼻人々、皆管領免許」とあって<sup>(27)</sup>、義教から罰せられていた人々は免許されていたため、1441年(嘉吉元年)閏9月に一色教親は智多郡を回復していた可能性がある。つまり、一色教親は遵行を実行するほどの体制を智多郡で整えていないために、尾張守護に遵行が命じられたという解釈である。とはいえ、仮に一色氏がすでに智多郡を回復していたとしても、この時点で遵行を幕府から命じられない具体的な理由は明らかにしえない。したがって、現時点の研究段階において、1441年(嘉吉元年)閏9月の智多郡主は武田信賢か、一色教親かは明確に確定できないように思われる。この点は今後の検討課題といえる。

### 3. 智多郡主に対する「守護」の呼称

1442年(嘉吉2年)4月10日、一色教親の被官沙弥浄賢・沙弥建昌らが醍醐寺三宝院領の但馬保五郷国衙代官職を請け負うことになり、請文が作成された。同日に、

一色教親はその保証として醍醐寺に書状を記していることが知られる(「醍醐寺文書」23函)<sup>(28)</sup>。一色氏は智多郡を失っていたが、これらの史料より、河村氏も説かれるように<sup>(29)</sup>、これ以前に智多郡の回復が幕府に認められたと見なされる。

1443年(嘉吉3年)になると、智多郡の段銭徴収権は一色教親に還付されたことが確かめられる。次は貞成親王が妻の南御方すなわち庭田幸子の領する藪郷・英比郷に賦課された段銭について、免除するよう一色教親に求めた際の記事である。

【史料カ】『看聞日記』嘉吉3年(1443年)  
3月26日条

廿六日、晴、(中略)<sup>(郷、以下同)</sup>藪卿・英比卿天役又被懸之間、一色<sup>(教親)</sup>守護ニ令申、免除之折紙出之、先度大方殿ニ被申て、守護ニ厳密ニ被仰、向後可止天役之由折紙出了、而又懸之条、乱吹之至不可説也、(後略)

注意したい点は、貞成親王は一色教親のことを「守護」と記している点である。そのような記事はさらに確かめられる。

【史料キ】『看聞日記』嘉吉3年(1443年)  
7月5日条

五日、晴、(中略)抑英比郷反銭免除事、<sup>(一色教親)</sup>守護ニ可被仰之由、大方殿へ南御方以御乳人被申、自公方被懸之間、難被仰之由奉、重御乳人參、さりとてハと申、さらは可被仰之由奉、無御等閑御返事也、

【史料ク】『看聞日記』嘉吉3年(1443年)  
11月9日条

九日、晴、(中略)抑藪卿守護使乱入、

号有罪科人為違乱、一色<sup>(教親)</sup>守護、此子細仰之間、進折紙、(後略)

このように郡主を「守護」と称している事例は山田氏によって他の地域でも見受けられると指摘されている<sup>(30)</sup>。加えて、他の地域と異なり、智多郡および海東郡の場合、郡の知行者は優先的に遵行命令を受けていることが継続的に確かめられることから、山田氏も智多郡・海東郡を「最も『分郡守護』らしくみえる」例としてあげられているのであろう。この2郡に、摂津国有馬郡を加えて、少なくともこの3郡に限定して「分郡守護」を用いるべきかという選択肢も示唆されているほどである。

しかし、山田氏の本当の主張は以上の3郡に「分郡守護」の存在を読み取ることにあるのではなく、当時の幕府は有力大名やその一門で將軍の近習になったような者に、郡を所領の一形態として与えていたことがあり、知行者の立場や諸状況が勘案されて、幕府から優先的に命令を受けることがあったと認識することにある。従来、あまりにも守護権が分割されたものとして捉えてしまい、郡主やある地域の知行者の支配の実態が十分に配慮されてこなかった研究状況を批判することにあつた<sup>(31)</sup>。

よって、智多郡主に対して「守護」という認識が確かめられたり、また室町幕府追加法266条<sup>(32)</sup>にみられるような、三河国渥美郡を「知行」していた一色義直を「守護」に置換しうる地位と見なしたりする認識は確かめられるが、一方で幕府は一色氏を「当郡守護」でなく、「当郡知行」と記しており、本質的には「郡主」として認識していたと読み取れる。一色教親も幕府が「守護」と規定していたならば、研究概念としてでは

なく、実態としてさらに分析すべきであるが、幕府の発給文書などから、そのようなことを記した史料は確認されていない。貞成親王が「守護」と称していることは社会的な認識としての「守護」という意味である。この点は別途、分析すべき重要な問題であるが、さしあたっては「郡主」と「守護」をめぐる幕府の認識を解明することの方が実態を知る上で有意義であろう。今後の室町幕府研究においては、守護に収斂されない、郡やある地域の知行者を十分に配慮した権力の分析や幕府権力論の構築が求められていると思われる。

## おわりに

応仁の乱になり、智多郡の一色氏の支配は実質的に崩壊していった。1468年（応仁2年）2月24日、将軍足利義政は料郡として、智多郡を伊勢貞宗に預け置いた足利義政袖判御教書（「蜷川家古文書」）が確認されているが<sup>(33)</sup>、その後、具体的に智多郡主が実際に当該地域の支配を行っていたことを示す史料が確認されなくなっていく。実質的な支配が失われても、1510年（永正7年）の「在京衆交名」に見られるように、一色氏は「尾張千多郡主五郎子、親父時御供衆」と記され、「郡主」としての立場は伝えられた。「郡主」の呼称の意味は別途、研究する余地があろう。

以上、主に山田氏、河村氏の研究成果を紹介することに終始した感があるが、最後に「郡主」論について智多郡の観点から展望を述べておきたい。

河村氏は一色氏の郡支配の点から、三河国渥美郡の分析をなされ、南北朝・室町初期の京極氏の保持していた渥美郡地頭職は

郡全体に対する所領と認識されていたとしても、観念的なもので、いわば鎌倉期の残滓という状態であったが、一色氏が1440年（永享12年）以降に認められた渥美郡知行権は守護権に近いものに変質していたと説かれている<sup>(34)</sup>。続けて、智多郡を知行する一色氏は尾張守護の権限が及ばない分郡において、守護機能を果たすように求められたのであろうことと併せて、形骸化していた郡地頭職の郡全体に対する権限が、室町期の幕府―守護体制の進化によって郡知行権として復活したと見通されている。これは先の山田氏の見解とはやや異なる感があるが、重要な指摘であると思われる。

筆者も鎌倉～南北朝期において、智多郡と守護の関わりを示す事例を多く見出すことはできず、いわゆる「守護領国」というような体制は構築されておらず、それは南北朝末期から室町期にかけて一色氏によって構築されるようになった印象を覚える。「分郡守護」という概念の使用は慎重になるべきであるが、支配のあり様や権力の構築という点でみていくと、智多郡における一色氏はあたかも「守護」であるように見受けられる。各地域における個別事例の実態やその権力の性格をさらに探っていく必要があるように思われる。

一色氏の支配の特徴や構造については、河村氏によって基礎的な分析が公表され、研究段階は大いに高められた。本稿では一色氏の被官について十分にふれられなかったが、河村氏の研究には多くの新知見が示されている。今後は郡主一色氏の権力と他の寺社や天皇家、貴族といった荘園領主、さらには地域の小領主などとの関わりやそれらの相互の影響などを明らかにするべき

であり、河村氏が渥美郡において指摘されたような特徴が智多郡でも認められうるのかどうか、検討する余地はあるように思われる。この点からいかなる歴史像を描くことができ、それはどのような意味があったと捉えられるのか、今後さらに考察が深められるべきである。中世後期の智多郡は全国的な観点から、従来の歴史像を大きく切り拓く可能性を持つ、注目すべき地域であることを確認し、稿を閉じることとする。

### 注一覧

- (1) 本稿において「知多郡」は中世の史料に多く記される「智多郡」の表記を用いることとする。
- (2) 佐藤進一『室町幕府守護制度の研究上』（東京大学出版会、1967年）。
- (3) 今谷明「守護領国制下における国郡支配について」（『室町幕府解体過程の研究』岩波書店、1985年、初出は1982年）。
- (4) 川岡勉「中世後期における分郡知行制の展開」（『中世の地域権力と西国社会』清文堂、2006年、初出は1988年）。
- (5) 山田徹「『分郡守護』論再考」（『年報中世史研究』38、2013年）。
- (6) 河村昭一『南北朝・室町期一色氏の権力構造』（戎光祥出版、2016年）。
- (7) 『愛知県史』資料編8 中世1（愛知県、2001年）資料番号83による。以下、『県史』中世1、83のように記す。
- (8) 『県史』中世1、99。
- (9) 『県史』中世1、29。
- (10) 『県史』中世1、194。
- (11) 『県史』中世1、1057。
- (12) 『県史』中世1、1362。
- (13) 『県史』中世1、1515。
- (14) 『新修半田市誌』上巻（半田市、1989年）
- 「第五章第二章 知多郡守護時代の半島」（上村喜久子氏執筆）によると、一色氏は鎌倉幕府滅亡後に智多郡に勢力を伸ばし、関連寺院の分布状況などから、範光の頃に大野荘地頭職など、智多内に所領を得ていた可能性は十分あると指摘されている。筆者も同様に考えているが、一色氏の具体的な活動を示す一次史料は確かめられていない。そのような史料が確認されるのは南北朝末期のことである。
- (15) 『県史』中世2、589（7）
- (16) 『県史』中世2、589（1）
- (17) 今谷明「一四―一五世紀の日本」（『岩波講座日本通史』9、岩波書店、1994年）、前注（5）山田氏論文注（68）、前注（6）河村氏著書29頁参照。
- (18) 前注（6）河村氏著書29頁。
- (19) 前注（6）河村氏著書29頁。
- (20) 『県史』中世2、650（12）、655。なお、『県史』中世2、「守護・守護代・守護又代」（尾張国）「尾張国海東・海西郡」（水野智之作成）参照。
- (21) 『県史』中世2、850（1）・（2）・（3）、896、897、1281など。
- (22) 『県史』中世2、1609。
- (23) 前注（6）河村氏著書36頁。
- (24) 『県史』中世2、1666。
- (25) 前注（5）山田氏論文288頁。
- (26) 前注（6）河村氏著書37頁。
- (27) 『建内記』嘉吉元年（1441年）6月26日条、前注（6）河村氏著書38頁。
- (28) 『県史』中世2、1684、1685。
- (29) 前注（6）河村氏著書38頁。
- (30) 前注（5）山田氏論文288頁。播磨国東三郡における赤松満政や京極氏を、六角氏と共に「両守護」と記された例があげられている。



(31) 山田氏論文の評価されるべき点は、従来、幕府の遵行命令が伝えられていると、その命令を受けた者は「守護」ないし「分郡守護」であるという認識から解放した点である。これより、現在残されている文書のうち、いわゆる在職の沿革を考える際に理解しにくく、捉えがたい史料、たとえば本稿で扱った史料でいえば、【史料オ】のような文書が発給される状況を考えやすくしてくれた点にある。これにより研究は大いに進展し、河村氏も説かれているように智多郡の郡主の沿革で、1441年（嘉吉元年）閏9月に武田氏が在職しているとの見解がもたらされたのである。筆者もこの山田氏の理解を支持しており、沿革が理解しにくい文書の発給の背景を探る手掛かりを得ることができ、大変参考になった。

その具体例として、永享12年(1440年)12月25日付一色教親奉行人連署奉書があげられる(醍醐寺文書、『県史』中世2、1630)。従来より、「尾張国海東郡守護一色教親奉行人連署奉書」と命名されてきたが、前注(6)河村氏著書34・35頁において、河村氏は教親を海東郡守護と認められていない。河村氏は教親が穂保郷の領主であった可能性から発給されたのではないかと推察されている。その可能性も大いに認められる。現時点で明確な根拠を示すことはできないが、教親が領主であった可能性に加えて、尾張守護斯波義健(千代徳)自身が遵行を十分に行えなかったことも影響していたのかもしれない。仮説にすぎないが、これらの仮説を着想することができるのは、山田氏論文の成果に接したからである。この文書発給の背景の解明については今後の

課題としたい。

(32) 『中世法制史料集 第二巻 室町幕府法』(岩波書店、1957年)、『県史』中世2、2137。

(33) 『県史』中世2、2265。

(34) 前注(6)河村氏著書75頁。

#### 付記

本稿は阿久比町歴史講座「尾張の歴史と支配」(阿久比町立中央公民館)のうち、2016年1月29日に行われた第2回「尾張守護による『智多郡』支配—分郡守護論の現状—」として行われた講演をもとに、その後発表された研究成果と私見を加えてまとめたものである。